

インドネシア・イスラームを理解する (ライブラリ・コーナー)

| | |
|-----|--|
| 著者 | 土佐 美菜実 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 244 |
| ページ | 71-71 |
| 発行年 | 2016-01 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00003044 |

インドネシア・イスラームを理解する

土佐 美菜美

今やインドネシアが世界最大のイスラーム人口国であるということはよく知られているかもしれない。ラマダンやハラルなど、近年ではイスラームに関する事柄がムスリムではない者にとっても身近になりつつある。ただ、彼らムスリムたちの生活はその国や地域によってさまざまである。以下では、インドネシアにおけるイスラーム的日常や社会生活あるいは政治事情を知るための二〇〇年以降に出版された日本語文献を紹介する。どの文献も読みやすいため、このテーマを学ぶ良いきっかけにしてみたい。幸いである。

倉沢愛子著『インドネシア イスラームの覚醒』（洋泉社 二〇〇六年）は基礎的知識から日常生活、社会現象、そして国際関係に至るまでイスラームに関わる種々のトピックを取り上げている。たとえばインドネシアにおける人口爆発への対策として政府は家族計画を推進している。最初、イスラーム側はこれを生命（＝神の摂理）への介入と捉え否定的だったものの、問題の深刻さゆえに計画的な出産の重要性に次第に理解を示すようになり、家族計画の成功が家庭の幸福に結びつくという考えのもと、イスラーム側も家族計画

への参与を促すようになった。近代化、グローバルズム、開発などの昨今の社会変容に対してイスラームの価値観を損なわずに、時にはその価値観を強く打ち出して歩み続けるインドネシアの諸相を知る一冊である。

小林寧子著『インドネシア 展開するイスラーム』（名古屋大学出版会 二〇〇八年）は植民地期の価値形成に始まり独立後の発展と今日の動向に至るまで、インドネシア社会におけるイスラーム化の進展を明らかにした大作である。またイスラーム教義や法に明るくない読者でもインドネシアのイスラーム近現代史を理解しやすいように書かれている。独立後を論じる本著の後半部分では、男女平等や宗教的寛容の理念に則ってイスラーム法を近代法へ歩み寄りせよとする法制定の動きを追っている。結果として、多妻婚や異宗教間婚姻については国内で大きな論争を呼び、明白な決着がつかなかったことなど、世俗的近代法体系のなかでイスラーム法が再定式化されていく過程とそこで生じた課題が丁寧に論じられている。

西野節男・服部美奈編『変貌するインドネシア・イスラーム教育』（東洋大学アジア文化研究所 二〇〇

〇七年）ではイスラーム寄宿学校プサントレンを中心に、経済発展や都市化、そして宗教教育への関心の高まりにともなうイスラーム教育の多様化がテーマとなっている。一般学校（スコラ）と宗教学校（マドラサ）とイスラーム寄宿学校（プサントレン）が学校教育制度の発展のなかでそれぞれに役割を担い、イスラーム教育の現代的なあり方を確立していく様相を考察している。また、かつては男子のみを受け入れてきたいくつかのプサントレンに女子部が新設されるという事例を紹介し、現代的なニーズに応えるプサントレンの姿を明らかにしている。イスラームの女子教育については、服部美奈著『インドネシアの近代女子教育 イスラーム改革運動のなかの女性』（勁草書房 二〇〇一年）も詳しい。

新井和広著『商品化するイスラーム―『雑誌アルキッサ』と予言者一族』（倉沢愛子編著『消費するインドネシア』慶應義塾大学出版会 二〇一三年）では、イスラーム雑誌『アルキッサ』を対象に、イスラームの商品化について論じている。イスラーム知識の程度に関わらず幅広い読者層を想定したこの雑誌が、大衆のニーズを探りながら内容やスタイルを変え、最終的には預言者一族サイイドの商品力の高さを見出して他のイスラーム雑誌と差別化していく過程が詳述されている。このほ

か、宗教者のポスターや祈祷のCD・DVDなど『アルキッサ』独自の豪華な付録についても紹介されており、これらの付録がどこまで読者の購買意欲をかきたてるのか気になるところである。一方、同著収録の野中葉著『イスラーム的価値の大衆―書籍と映画に見るイスラーム的小説の台頭』では、イスラーム的価値を大衆へ根付かせた小説や映画を取り上げている。これらの媒体が民主化やグローバル化を通じて新たな価値創出の拠り所となることでインドネシアのイスラーム化が進み、同時に伝統的宗教権威に代わってイスラームの理想像を人びとに提供していることを指摘している。

最後に、宗教市場の様相と政党の選挙戦略を扱った見市建著『新興大衆インドネシアの宗教市場と政治』（NTT出版 二〇一四年）を紹介したい。宗教組織や政党・政治家などの供給側と、宗教活動への参加者や有権者といった需要側の相互作用によるイスラームを中心とした「市場」の形成を明らかにしている。イスラーム主義政党の台頭や「セレブ説教師」の求心力など、初の庶民出身大統領ジョコ・ウィドドを誕生させた近年の市場動向を様々な角度から論じている。

（とせ みなみ／アジア経済研究所 図書館）